



いつもと変わらぬ夕暮れどき。

ベンチで一服する銀さんの隣には、珍しい人物が座っていた。

「ああいう形で私をだし抜くとは思いませんでしたよ」

九十九はずり落ちてくる丸眼鏡を押し上げながら言った。

汗ばむ程の陽気に顔をしかめながらも、銀さんの方は見ようもしない。

「ケッ、よくいうぜ。おおかた遠くから俺を見張ってたんだろよ」

「まさかあ〜！ ボクそんなに暇人じゃあないですって」

心底驚いたような顔をしてみせた九十九は、しれっとしてその後を続けた。

「ボクが監視してたのは清水家のほうですよ」

「あの家を見張ってたのか？」

「ええ、朝までね」

「じゃあ…全部知ってて…お前は」

銀さんは絶句した。

堀川君が来るかも知れないとは思っていたんですがねと、呆気にとられている銀さんを尻目に彼は言葉を続けた。

「まさか貴方が、あんな重装備で登場するとは。あげく血相変えて朝の街を大爆走では、咎める前に笑っちゃいました。察するに久我さん、清水家の方と個人的な繋がりでもあるようですね。で、堀川君があのタイミングで一時帰宅したのも、清水家を訪ねたのも貴方の差し金でしょう」

「そこまで判ってて何で止めなかったんだ？ 簡単だろうが」

「気が変わったんです。お手並みを見たくなかった」

「リスクは大きかったんだぞ。それでもか」

「リスク無しで得られるものなぞ有りません」

「…」

「まあ、次もあるでしょうし。楽しみはとっておくとしますか」

「次って。お嬢はあの通りピンピンしてるじゃないか」

銀さんが顔を曇らせた。

「終わってませんよ。まだ」

ポン、ッポポン

二人の足下にボールが転がってきた。

「ボールとってくださーい！」

「みーちゃん、また鞠つきかい？」

「サッカーだよお、やだなあ」

元気良く走り寄ってきた碧は、二人にペコリと頭を下げたボールを受け取った。

「おねえちゃんなら大丈夫だよ。そんなに先生を疑っちゃ駄目だからね！ 『こいつコイツ』って、もうバンバン聞こえてくるんだから」

「判ったから、あっちで遊んでな」

答えてから、銀さんはギクリとして思わず九十九の方を見た。

怖い顔が、少女の後ろ姿をジッと睨んでいる。

しまった…

◇

九十九は、ボールを蹴って遊んでいる碧をジッと睨んでいた。

「なるほど。そういう事だったか」

ややあって九十九が口を開く。

「ガードが下がるのが思ったより早かったのは、あの子の力のせい…成る程な」

「お前、まさか坊やの時のように、みーちゃんを使って何かやろうってんじゃないだろうな」

「あの能力自体に興味は無いと、以前にも言った筈です。必要があれば別ですがね」

意地の悪い笑いを浮かべて、その日初めて九十九は銀さんを正面から見た。

「坊やだって酷い目にあったんだ、あんな子供に耐えられる訳がねえじゃないか！」

「おちついてくださいよお～、やるなんて言ってないじゃないですかあ～」

またいつものC調に戻った九十九が銀さんの激しい口調を丸め込む。

こいつ、コロコロ調子を変えやがって

いつもこれで、こっちはペースを狂わされるんだ

「それに久我さん、心配事をあまり増やさない方がいいんじゃないですか」

「…？どういう意味だ」

「刑事が来てましたね、今日」

銀さんの顔色が変わるのを確かめてから、九十九はゆっくりと言葉を繋いだ。

「貴方に興味が出てきてね、調べてみたんですよ、経歴を。履歴書は綺麗なモンでした。まささらで」

「それだけじゃないだろう」

「知り合いに、こういった事を調べるのが得意な人がいてね。動いてもらいました」

久我銀次 43歳

元 広域暴力団山下会系墨田組若頭

7年前に近隣組織の組長、及び組員を横浜中華街にて拳銃で射殺

自らも4発の銃弾を浴びて負傷、意識不明のまま逮捕される

計画性の無い偶発的事件と判断され、初犯という事もあり刑はこの手の事件としては異例な程軽かった

出所後の消息は不明

「…もういいだろう」

乾いた声で銀さんが言った。

「刑事は苦手、って訳ですね」

「ああ」

指の間から、煙草の灰がゴソッと落ちて道に砕けた。

◇

午後6時58分。

成田空港到着ロビー。

長身、瘦身の男がゲートから足を踏み出した。

傷跡だらけの顔にアイパッチ。

一般客は皆、男の周りを大きく迂回してそそくさと手荷物預かり所へと急いでいた。

久しぶりだな

男は体重が無いかのように、ユラリと歩き出す。

◇

衣笠恵美子の変化は、今では誰の目にも明らかであった。

最近の彼女は必要以上に寡黙で、仕事の合間にもじっと思い詰めたような表情を崩さない。

「なあエミちゃん、最近疲れてるんじゃないか？ 他のナース達も心配してるよ」

若い医師はカルテの整理をしながら、後ろに立つ恵美子にさりげなく話し掛けてみた。

「聞き間違いでしょう、先生の」

「間違い？ 何が？」

「心配じゃなくて怖がっているのよ、あの人たち」

「あのなあ」

回転椅子ごとクルリと振り向くと、彼は真正面から恵美子を見た。

顔の至る所に陰があった。眼の周囲、頬、こめかみ。

顔色もすぐれない。

ろくに寝ていないし食べていないのは医者でなくとも一目で判る顔だった。

「悩みがあるなら言ってみないか。長官に何か言われたのかい？ あの娘、清水さんの様子だってすっかり良くなったし、以前なら自分の事のように喜んでいた筈じゃないか。今の君はまるで、たちの悪いものにでもとり憑かれているみたいだぜ」

「九十九先生はいいんです、もう。私、見つけましたから」

「見つけたって…」

恵美子は黙ったまま部屋を出ていった。

彼は腕組みしたまま、深く溜息をついてドアの方を眺めるしかなかった。

九十九

長官よお

お前の患者、一人増えちまったんじゃないか

◇

「ふえっくしょんっ！！」

特大のくしゃみに顔をしかめる九十九に、ベッドに腰掛けた加夏子は思わず笑ってしまった。

「長官、風邪ですかあ？」

「おおかた悪友が噂でもしてるんだらう。僕の事はいいから、テストを続けるよ」

「ハァ～イ」

定期的に行っている心理テストを、慣れた様子で加夏子はこなし終えた。

10分とかかかっていない。

「ところでボーイフレンドはどうしたんだい？ 昨日からまだ一度も姿を見せていないじゃないか。も～しかしてえ～ケンカしちゃったのかなあ～？」

「また帰宅中ですよ。お兄さんが久しぶりに帰国したとかで。先生、ちょっとヤラシイ」

加夏子がふくれて見せた。

暴力癖が消えた彼女は、今は主治医の九十九とも打ち解けていた。

「そう…お兄さんがね…」

テスト用紙をまとめていた九十九の手が少しだけ止まり、またせわしなく動き出す。